



ケニーD

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

凶

【Nコード】

N7266R

【作者名】

ケニード

【あらすじ】

「なにものにもなれないのなら」。高校を辞めて絵を描きたかった少女の心は崩れてゆき、「人々は刺激に飢えている」として、やがて殺人ですらエンターテイメントだと考えるようになり、犯罪を企てる。

1（前書き）

この作品におけるタイトル「凶」の意味は、「不吉」ではなく「空っぽ」です。数年前に他サイトにて掲載済みの作品。

細長い歩道をゆつくりと歩く、丸まった小さな老夫婦を教室の窓から眺めている時に、終業のチャイムがりと鳴ったので「高校を辞めよう——」、そう思いました。私は別段、優秀でもなくかといつて劣等でもなく、ほんとうに普通の、つまらない、どこにでもいるような人間です。どこにでもいる人間のつまらなさ、私のそれと合致するのはわかりませんが、人と話をしてもすぐに生あくびのようなものをされるのだから、私はつまらない人間なのです。

高校に入学して一年と少し。最近ではもう、クラスメイトともあまり話していません。私の存在の位置を知っている教師が、にやついた顔でわざと出した難解な質問に答えるよう、名指しして席を立たせることがしばしばあつて、しかし私は席を立てて答えもせずじつと黙ったままに慣れました。座れ、とも言われないので、その授業中、立ったままにいたこともあつたように思います。私は、ほんとうにつまらない人間です。家族や親戚、数少ない友人からは、あんたは変わっている、と言われたこともあります、私に言わせれば、誰もが変人です。皆が皆、私を同じ目で見るのですから。

高校を辞めたい、と母に相談すると、呆れ顔で弟をわざわざ呼び一緒になつて私を笑いました。小学生の弟はなにもわかっていないでしょうけれど、嫁の貰い手もなくなるわよ、と言う母と共に嘲笑するのです。ただ日々老いるだけの、機械のような主婦である母は私を追い出したいのでしょうか。山姥のような顔を見ると、そう思わずにはられません。

時機をみて、また説得しようと思い、自主退学の要素として、必然的に辞めなければならなくなるような事柄を作り出そうと、自分の部屋で制服を切りきざみ、ごみ箱へ押し込み、生徒手帳を灰皿の

上で燃やしました。これで足りなければ、他も考えなければなりません。だからと言って、重犯罪的なことをするわけではなく、たとえば、登校拒否や、いざとなれば非常な覚悟を決めて家出するのもいいでしょう。私は、なんとなく学校を辞めたくなっただけなのですが、そのなんとなくが私を動かすのだから、それを自己の柱として守るのです。そういった行為が、この曖昧を、いずれは強固な決意へと結びつけてくれるのかもしれませんが。しかし、わざわざ辞める理由になんらかの信念を抱く必要も、私にはありませんが。信念があるうとなかろうと、究極的には「生きる」に繋がるのだと思います。というよりもむしろ、すべては生きるためのご都合主義なのかもしれません。とるに足らない例ですが、私の吸っている煙草が足元にあるので、これを用いて考えると、禁煙の理由は、自分の健康を考慮して、というものがほとんどでしょう。私がこの歳で煙草を吸うのは、格好を付けているわけではなく（こんなもので私の格好がつくとも思いませんが）、父が吸っていたからです。煙草を吸った切っ掛けが父でした。中学生の頃、煙草が親にバレてひどく叱られ、それからどういう交渉をしたのかさっぱり覚えていませんが、人前では吸わないという約束で決着がつけました。だから、いつも部屋の中でだけ吸っています。場所が限られているとは言え、今では、これがなければ精神のかすかな安定は図れないでしょう。これも生きるため。いつの間にか、理由があと付けでも、生につながっているのです。禁煙を試みようともしうなのです。だから、なにをしたところで、究極的には「生きる」で間違いないのだと思っています。ただ単に、自分に都合のいい理由を、いかに高貴なものに見せるか、それだけのようない気がします。

私は、利口ではないので、高校を辞めたいということに対して、人を納得させるような、もっともらしく感動的な理由を未だ考えられません。これも、時間が解決してくれるのかもしれませんが。何年後にはきっと、生きるために辞めたのです、と言えることでしょう。

ついでに、辞めてどうするのかと訊かれた時のために、なにか一つ、いい返答をいま考えることにします。時にはその返答が、辞める理由として成立するかもしれません。しかし、その返答が確実な未来を約束するわけではないのですから、考えるものは、嘘っぱちでも構わないのです。だって、人生って、嘘だらけでしょう？

こんなことを言う自分はもしかすると、冷めた人間なのかもしれません。でも、暑苦しく「嘘はだめだ。正直に生きよう！ 正しいことをしよう！」なんて言っている人間が、私には滑稽に見えるのです。その滑稽さは、愚昧と胡乱と一種の憐憫を含み、他には顔を赤らめる羞恥があるような気がします。そんな人に近づけば近づくほど、恥ずかしくて目もあてられなくなります。だから、人間は皆私のようにほとんどを黙って過ごせばいいのです。そうすればきっと、小鳥だって寄ってきてくれることでしょう。

芸術！ それが私の返答になりました。私はとりあえず、芸術家を目指すということに決めたのです。水彩画なら、なんとなくは描けるので、それを押し出してもいいでしょう。もちろん、単なる退学の理由としてだけです。

芸術と言われ、母はなんと答えるでしょうか。分らず屋のような、芸術は崇高だと静かに説き伏せてみましょうか。それこそ、私に不向きな理知的な作業になってしまいます。かといって、熱情に侵されながら訴えるのも憚れるのです。私の中にもともと焰がないのだから、そんなものを取り入れてしまえば、加減もわからないまま、忽ちにして私は燃えかすになってしまふことでしょう。頑として譲らない、これしかなさそうです。

母の次は父の説得になりますが、あの人は私に厳しい言葉を投げかけはしても、どこか甘いところがあるので、なんとかなるはずですよ。

私はもう一度母にかけ合いました。そこで私が本気なのだと知るとすぐに、世間体がどうの、人生がどうの、面倒がどうの、となにやら述べましたが、呆れ顔は変わりませんでした。

「私の人生なんだから、自由にするの。いいじゃないそれくらい。高校がなんだっていうのよ。親戚のおじさんは、みんなが高校へ行くから真似して行ってるだけだ、って言ってたわ。そのとおりよ。私も、なんとなく入学したただけだもん。だから、なんとなく辞めたっていいはずじゃないの。もちろん、絵を描くわ。それがあたしの夢よ。画家になるの。だから、学歴なんて関係ない。世間に恥ずかしいって思うんだったら、夫婦喧嘩をもっとやればいいわ。そっちの怒鳴り声のほうがよくばど恥ずかしいんだから」とまで言って、少し疲れました。ほんの少しだけ熱が入ってしまったようで、気恥ずかしくあります。

「馬鹿ね……」と母はほんとうに小さく零したあと、「もう知らないからね。父さん次第では家を出てもらうからね」と言いました。やっぱり、追い出したくてたまらないのでしょうか。厭な人。

でも、父は私を追い出すような人ではありません。そもそも、私は女の子なのです。女の子を追い出すような不埒な父親がいるでしょうか。もし、どこかにいるのなら、それは女術に等しく、全ての女にとっての敵であり、そんな人間は、今まで虐げられた幾万もの女性の悲鳴と慟哭をあつめた錠付きの狭い部屋に放り込まれなければなりません。そこで生じるだろう後悔と悔悛の情に生涯悶絶すればいいのです。時おり夜警に来る、見下す男に対して懺悔をしてもはや許されることはないでしょう。

父の帰りを待つあいだ、私は部屋に籠り、学校を辞めたあと、それからどうしようか、少し、本気で考えることにしました。本気で考えるのは、なにひとつ決めていなかったからです。

ベッドの上で、ただただぼつと、天井を見たり、目を閉じたり、未来という漢字を頭の中で分解してみたり……。

いつの間にか、私の部屋に夜が入りこんでいました。それを気づかなかつたのは、布団の暖かさのせいでしょう。

明かりをつけると、夜は一目散に部屋を逃げだし、窓の外からこちらを覗いています。ほんの少し、光を手には夜を追い掛け回したく

なりましたが、きっと、私に微笑むこともないのでしょう。空には、あきらめたかのように薄く輝く星があるのだから、なんとなく理解できます。ああ、なにか一つ、才能の花でも私の中に咲いたなら！……そんな慟哭よりも、とにかく父でした。未来のヴィジョンをひとつとして決められませんでした。父がなんと言うか、出て行けとは言わないでしょうけれど、父の言葉こそが、今は重要です。もちろん、それは私のいっさいを縛るわけではなく、単に、私の道を決めるひとつの切っ掛けになるような気がしたのです。

時計を見ると、八時半を過ぎたばかり。父はまだ戻ってきていないようで、階下では、夕食は私を措いて済ましたのでしょう、洗いや物の食器のぶつかる音が聞こえます。

どうやら、私は食事に呼ばれず、無視されたようです。別に悔しいとも思いませんが、露骨な母には嫌気がします。鏡張りの部屋に放り込んでやるうかしら。そうすればきっと、母は自分の汚らしい表情を見て、嗚咽がこみ上げることでしょう。でも、学校を辞めることで真剣に悩んでいるふうを装う必要もあるのだから、食事に呼ばれなかったのは丁度よかったです。私は、今夜の食事はとりません。自分の態度を示すのに、食事というものはとても便利なのだと気づきました。友達のたくさんいる子なら、学校でお弁当のほとんどを残してみせれば、「どうしたの？」と心配して皆が寄ってくるはずで、それを理解してお弁当をたくみに残す子は、とてもしたかなのだと思います。ふと、笑みがこぼれました。私は今それを学んだので、今後はこの食事のとりかたをいろいろと工夫することによって、自らの立場を演出し、気を引かせ、時には人を欺くこともできるでしょう。特に意地の悪い母を――。

煙草に火をつけて、煙をもてあそんでいると、無色の物憂さが私の心を少し震わせ、輪郭を滲ませて昇る煙のような、おぼろな不安へと変えました。そんな気分になったのは、あまりにも、夜が静かだからでしょうか。だからと言って、この静寂から解放されるために聴くような音楽もないのです。私は、音楽に感情を左右されたく

ないのです。旋律と言葉に心を同調させ、無理に感情の深みにはまる必要が、いったいどこにあるのでしょうか。勇気の出る曲、恋の賛歌、無常……。人々に向けられた音楽は、あまりにも一方的です。なぜあなたの、あなたたちの感情なのですか？ どうせ奏でるのなら、アーティストでない私の心を奏でてください。一人一人の心を、その一人一人のための音楽にしてください。それができた時、私は初めて音の波に身をゆだねることができるようでしょう。だから今は、憂いに沈もうとも、無音の世界を愛します。

ほんの一瞬、煙草が小さな音を立てて赤く激しく燃えました。部屋にかすかな風が吹いたのか、それとも私の吐息のせいなのかはわかりませんが、オレンジ色に輝く玉を見ていると、煙草の一本の長さが人生をあらわしているように思えて来、ならば、思い出は、この鈍色の燃えかすのようにぶら下がってひらと落ちて散る灰のように、やがて色を失い、消えてゆくのでしょうか。私はいつも、未来がまだあるのに、煙草を灰皿に折ってしまします。人生も、まっとうせず未来を残して死ぬほうが、なんだかふと、綺麗ではないかという気がしました。私自身はまだ、火をつけたところです。それをすぐに消してしまえば、煙草と同様に、もったいない、としか思われないでしょう。私はまだ生きます。夭折なんてものは、才能のある者がすればいいのです。私のようにつまらない人間には、それこそ無駄死にでしかありません。

ようやく、玄関の扉が開く音がし、父が帰って来ました。私は誰よりも早く声をかけようと階段を駆け下り、「おかえりなさい」と背の高い父を見上げて微笑み、その時に、あつ、と思いいたり、すぐに神妙な表情に変えたのですけれど、父は鈍感なのか、皺ひとつ作ることなく「ただいま」とだけ言って居間に入りました。

母も弟も座ってテレビを見ています。私にでもわかる、私自身よりもつまらないテレビ番組なのに、よくそんなに笑えるものだ、と不思議でなりません。

「ご飯は？」と母が聞きました。「うん」と父は一言だけ返事をし

ます。いつもこうなので、母はなにも言わず、そそくさと食事の用意を始め、父はスーツを脱ぎ、手洗いを済ませて、おそらくは安堵の嘆息と共に、座布団の上に座るのでした。

「ねえ父さん。私、高校を辞めようと思ってるの」

余計なことを母に吹き込まれないように、私が一番に切り出しました。

「ん？　なんでだ？　辞める必要なんてないだろう」

「まったく馬鹿な子でしょ？　あなたからもちゃんと言ってやってよ」と母が台所から口を挟んできたので、「私もご飯食べる」と手を煩わせてやったのです。ほら、母はなにも言えませんが、父がいるところではこうなのです。私も少し、意地が悪いでしょうか。いいえ、全ての原因は母なのだから、何も気にする必要はなく、母のこの労は、当然の酬いです。ただ問題は、特にお腹も減っていない、ということかしら。

「なんで辞めちゃいけないの？」

私は、眼鏡をティッシュで拭いている父の方へ向き直りました。

「なんでって、それが当たり前だからだ」と眼鏡をかけて眉をしかめる父。

「当たり前って？」

「当たり前は当たり前だ。当然のことだ。辞めたいだなんて、いじめでも受けてるのか？　もしそうだったら、ちゃんと話してみなさい。協力してあげるから」

「いじめられて、それをずっと耐えられるほど、私は利口じゃない。すぐにでもやり返すわ」

「じゃあなんなんだ」

「絵描きに、なりたいの」

「そんなもの、高校でてからでもなれるだろう？」

父は少し、落胆したようでした。

「なれるかもしれないけど、学歴が必要ないんだから、辞めるのよ」
「絵描きになれなかった時のために、学歴は必要なんだよ」

「絵を描けない人生なんて、無意味だわ」

父が見せた深い嘆息は、きつと、食事を不味く感じさせるものでしょう。

「そんな子は、家に置いておけないわよね？」

母がまた、台所から声をはさみました。

「だからと言って、放り出せるわけもないだろう。なんてことを言うんだ、お前はそれでも親か。よく考えてものを言いなさい」

「……ごめんなさい」

馬鹿な人。私は母を内心で笑わずにはいられず、不意に口元を緩めてしまいました。

「自分の人生は自分で決めるの。だから、高校を辞める。駄目だと言っても、私はもう高校へは行かないから」

そう言つて、食事はとらずに自分の部屋に戻り、なんとなく、満たされた心地になりました。追い出されないことが確実になったのだから、私はもう、好きにしているのです。理由をあれこれ考える必要もなくなりました。学校へ行かないから辞める、それだけで十分なのです。ただ、やっぱり、何年か後には、生きるために辞めたと言えるようにだけはなりたいと、そう思います。しかし、私がないをしていようと、辞めたあとでなら、そうやって言うことは簡単なのですけれど。

翌朝、私は今までに感じたことのないほどの清新な光と澄明な空気の中で、ほんとうに自然に、お花畑で生まれたばかりのように目が覚め、今にも使いの者が、どこからかい報せでももって来そうなそんな気になりました。きつと、きらめく光が、開いたばかりの目には、白や黄の花に見えたのでしょう。

「いつてきまあす」と聞こえたので、弟がちょうど登校したところのようです。母は、目覚まし時計をセットしなかった私を起こしには来なかったようで、これで、辞めることを認められたのだ、と思いました。あとは、学校に行つて書類をもらつて、これまでの学級生活と似ているだろう空白を文字で埋めるだけです。きつと、テス

トなんかよりも簡単でしょう。

顔を洗い、歯を磨いて、パジャマ姿のまま座布団に座ると、無愛想な母は、私を蔑むように見ながら、それでもコーヒートーストをテーブルに並べ、朝食の準備をしてくれました。これに対して、私は感謝すべきでしょうか。

テレビの芸能ニュースを、私への無関心の代替行為のようにして見ている母に、

「学校で先生にやめるって言うてくる」

そう言っても、母は無言のまま、ただ嘆息しただけで、こちらを振り向きもしません。私はそれ以上言うこともなく、ただ静かにイチゴジャムの塗られたトーストをかじり、ゆっくりと味わったのですけれど、そのジャムの甘さを感じれば感じるほど、なぜだか次第に切なくなつてゆくのでした。

私のようなつまらない人間に、生きるこの意味や、存在の価値があるのでしょうか。若くして死んだところで、誰ももつたいないなんて思ってくれないのではないかしら、とそんな気がして、それなら、私は死の意味を探し、死に価値を見出そうという気になりました。高校を辞めれば、時間はたっぷりとできるでしょう。それからじっくり考えてみます。

朝食を終え、私服に着替えました。ファッションだけが、唯一自分を表せるような気がして、服はいつも少しだけこだわって買っています。でも、学校に行くのに、張り切るわけにもいきません。ただでさえ制服じゃないということが目立つはずだし、服装に関して、もう私にとってどうでもいい生徒らに、いちいちどうこう思われるのも嫌ですから――。私は、目立たずに、ひっそりと学校を去りたいのです。だから、ジーンズとグレーの薄手のスウェットを選び、茶色のキャスケットをかぶって顔を隠すことにしました。

家を出て、外の空気に触れた瞬間からもう、やっぱり世界が今までとは違っている、と確信できたのはなぜでしょうか。太陽だけでなく、その光の落ちるアスファルトの粒子すらも輝いて見え、そし

て私は、ふと空を見上げたときに、風の賛歌と梢の喝采を確かに聴いたのです。これはきつと、私だけのもの。どこかで同じように今、学校を辞める決心をして校舎へ向かおうとする人がいようと、自主退学の原因が、私と同じように、自然の本質のような一種の気まぐれでなければ、歌声は聴こえることもないでしょう。過去を知らぬ風、光を宿した鏡のような太陽、青く灼けた空、そしてところどころに漂う、傷を癒すやわらかな白い軟膏のような雲。私は、その視界の全てに抱かれたくなったのでした。

学校へ到着したころには、すでに授業が始まっていて、担任は職員室におらず、私は仕方なしに教頭先生に学校を辞める旨を伝えました。すると、「辞めるにしても、まだ生徒には変わりないんだから、制服は着なくちゃ駄目だよ。なぜ辞めたいのか、それだけとりあえず教えてくれないかな」と黒と白の混じった太い眉を撫でながらとても優しく言い、それから誰もいない生徒指導室まで私を連れ、そこでまた、じっくりと話をしようということになったのですけれど、教頭先生は用事があるということ、あまり見たことのない二十五歳くらいの若い女教師が、相談役としてやって来たのです。

若いせい、それとも穏やかな表情のせい、どこことなく頼りなさそうに見え、どうせ言うことは決まっているのだから、少し、彼女のこれからのためにも、つまらないなりにひねくれた生徒を演じて困らせてやろうという気になりました。

「えつと、どうして学校を辞めたいのかな？」

ミディアムロングの真っ直ぐな黒髪を軽くなで、謹厳さを宿した眼差しで私をじっと見ています。教育というものに対して、未だ消えない、もしくは沸きだしたばかりの、自身の理想を胸に抱いて接しているのでしょう。私は目を合わすことができませんでした。

「つまらないからです」

「なにがつまらないの？ 授業？ それとも学校生活？」

「先生は、学校を辞めなかったから教師になれたんですね？ なぜ辞めようと思わなかったのですか？ それを先に聞かせてください」

い」

「ううん。それはね、やっぱり夢があったからだと思う。今こうして、教師になって夢は叶ってる。人にはある程度、夢は必要なのよ。あなたには夢がないのかな？　だから先が見えなくて辞めたくなくなったか」

「違います。夢はどうだっていいんです。つまらないのは私自身。ああ、でも、私がつまらないから辞めるというのは嘘の理由でした。だって、私のつまらなさは、今に始まったことじゃないですから……。本当のことを言うと、特に理由はないんです。窓から明るい外を見て、綺麗だと思ったのかな。その時にチャイムが鳴って、ふと、辞めたくなったんです」

ほんの一瞬、この女教師は表情をしかめました。すぐにそれをおそらくは熱意を再燃させることで隠し、私に微笑みました。そして、とても馬鹿なことを言ったのです。

「素敵ね」と。

もしかすると、私を理解したような気にいるのかもしれませんが。

このような似非教師には、寒気がします。

「素敵だと思うのなら、さっさと辞める手続きをさせてください。切っ掛けがどんなものだったとしても、辞めると決めたから、もう、誰になんと言われようと辞めるんです。親は呆れてました。でも、それだけです。止めることはできないんです」

「そうだ。なんにしても、お母さんかな、お母さんには来てもらわないと駄目よ。担任の先生と話をしなきゃいけないから」

「必要ならそうします。話はそれだけですか？」

「んとね、辞めるってことがどういうことか、それだけでも考えて欲しいかな」

「そんなのは、私にとってどうでもいいことです」

ようやく先生の目を見ることができました。哀れみを漂わせているのが容易に伝わる単純な表情。この人はきつと、いい教師になる。なんとなく、そんな気がしました。

しばらく沈黙が続き、彼女はなにかをあれこれ考えていたようで、そうして、ふっと表情が凛々しくなったときに、

「わかりました。あなたにはもう、なにも言うことはありません」と丁寧に告げてきたのでした。

私はこの時、なぜだか泣きなくなり、泣けば、私の中のすべてが変わるような気がしたのですけれど、やがて出た彼女の深い嘆息が、目の前にあるなにかのノート一枚すら震わせることができなかったのを見て、不思議な嬉しさと、勝利の優越感が自身を満たしたのです。

放課後、母が私を伴って、校舎に向かいました。空いている教室に入り、担任と三人でつまらない話をしているうちに、母は涙を零したようで、それを見た時に、私は、馬鹿な娘でごめんなさい、と心の中で素直に謝ったのです。だからと言って、今後、母との関係が変わるということもないでしょうけれど。

しばらく話をして、辞めることが正式に決定されました。あとは、この担任がどこかへ書類を提出するだけです。それはもう、私の知るところではありません。私は、安心してここを去ればいいのです。母より先に緑色の廊下へ出、一人で歩いているうちに、新しい日々を迎えられることに対する歡喜が沸き、ふと、渡り廊下の窓から運動場でクラブ活動にいそむ生徒らを見た時には、その感情がより強く変わったのに気づきました。今、私は彼らを見下したのです。彼らの不自由さを、哀れんだのです。

私は、特に望んでもいませんでしたが、自由を手に入れました。それを彼らへのあてつけのように叫んでやろうと考えれば考えるほど、なぜか、同時に、虚無感に満ちた涙が溢れそうになるのは、なにかひとつ、決別と同時に、価値のあるものを手に入れたかったかなのかもしれませんか。虚栄心。私は、つまらない存在であるばかりか、卑小でもあったようです。私は私。それでいいではありませんか。十分ではありませんか。誰か、できることなら、馬鹿な私を抱きしめてください――。

荷物をまとめて教室へ入ると、Ｔさんがあの時の私と同じように、窓から外を眺めていました。でも、彼女は別に、学校を辞めようとは思っていないでしょう。あまり話したこともない人でしたが、私が机から教科書を出して鞆にしまっていると、「どうしたの？　なんで私服なの？」と訊いてきました。「辞めるから」とだけ言う。

「そっか。元気だね」とそっけなく返したのです。

目を見ると、かすかな実直がにじみ出ていたので、おそらくは、この少ない言葉の中で、理解を示してくれたのでしょう。こういう人となら、私はきつと、いい友人関係が作れるに違いない、と思いました。向こうはやっぱり、いずれ私をつまらないと思うはずで、だから、これ以上の会話も必要ないのです。

「夕日が、暖かいね」

独り言のように、外に顔を向けながら彼女は呟きました。気づけば、教室は紅く染まっっていて、私もふと、外を見たのです。すっかり花の散っている桜の木。窓から見える景色を桜が埋めつくしていたあの頃は、教室に華やかな色彩を与えてくれました。今はただ、紅い色。人は、同じものを見て、同じように感じるのでしょうか。これから新しい道を行く私と、なにも変わらないだろう彼女――。言葉に耳を傾けたからか、私の道は、すでに黄昏時のような気がし、私がそう思うことを知って、Ｔさんがわざわざ言ったのではないかという気まで起こったのですけれど、この優しい暖かさが、それを否定してくれました。

「そうだね。これからきつと、暑くなる。私は、この景色を忘れないわ。それじゃあ、さようなら」

そう言う私を見て、彼女はなにも返事をしませんでした。でも、それでいいのです。なにも言わなかったことで、この絵が、私の中に、より強く残るのでしょうか。

前に転がる膨大な時間を少しでも有意義に潰すために、なにか面白い本があれば読書でもしようと思ったので、家に帰る前に書店へ寄りました。派手な色彩の、手書きで作られたポップを見ながら、本を手に取り、少し頁をめくっては元に戻し、少し歩いてそれを繰り返す。結局、私を刺激するような、衝撃的な何かが書かれていないものは見つからず、書店を後にしました。私が求めているものは、人生です。わざとらしく大げさに作られた感動も、悲哀も、歓

喜もいりません。ただそこに、小さくても、人生の妙諦や無常があれば、私は満足なのです。まったく不勉強のせいか、これに関しては、どの作家がどういったものを書いているのかの知識もなく、相変わらず、小説の世界を開けないままでした。なにも見つからなかったそんな時は、漫画を絵とタイトルだけで判断して、気になるものを何冊か買うのですけれど、今日はそんな気も起きず、そのまま家に帰ったのです。

家には、母が先に戻っていて、手を洗う私に、「これから、本当にどうするの？　ちゃんと絵を勉強するの？」と大きな声で訊きました。

「わからないけど、でも、ほんの些細な切っ掛けがあれば、私はそこへ進むと思う。でもいまは少し休みたいから、しばらくはなんにも言わないで欲しいの」

そう言つて部屋へ上がり、少しのあいだ、ベッドでゆっくり眠ろうと思いました。なんだか、ほんとうに、私は疲れたような気がしていて、今はただ、とにかく眠りたく、不透明な意識を抱えたまま、じつと目を閉じたのでした。

暗い中で目が覚めた時に、ノイズひとつ感じないほどの冷たい静寂が、私の周囲を包んでいたので、見えない天井を眺めながら、どれくらい寝たのかしら、もしかすると二日間くらい寝ていたのかもしれない、などと考え、やっぱり、天井を見つづけていました。

つけた明かりが眩しく私の前に立ちはだかり、光に慣れてから時計を見て、いったい何日の二時過ぎなのかな、と気になったものの、煙草を吸って、ため息をついて、手鏡で自分のさえない表情を見ているうちに、そんなことは忘れ、それから、渴いた喉を潤そうと、寝ている家族に気を遣いながら階段を静かにおりて、ひっそりと唸る冷蔵庫のドアを開け、冷たくて甘い紅茶を飲みました。ほんの少しの安堵、安心感。なにかを飲むと、たまにこんな気分が、不意に訪れることがあります。どうしてかしら、とは思うのですけれど、生の実感、と私は安易に片付けます。だって、本当のことを言つて

もつまらないし、これといって気の利いた大げさな言葉も見つからないのですから。

クッションに座り、半分ほど残っている紅茶のグラスをテーブルに置いてテレビを付けました。画質の粗い、古そうな映画が放送されていて、画面の中では、酷熱の太陽と地を這う砂煙を色添えに、ガンマンが決闘をする直前でした。おそらく、二人のガンマンのどちらかが死ぬのでしょうか。

私は黙って画面を見、結果を待ちました。中では、二人が同時に拳銃を抜き、瞬間に、小さな閃光がふたつ。一人が倒れたあとに、もう一人が後を追うように倒れ、周囲がどよめきます。結果は、相打ちでした。

こんな事があっていいのでしょうか。結果から見ると、彼らはこの映画において、それほど重要な役割でないのでしょうか。それだけの正義をかけているはずのこの決闘が、賞賛も歓喜もない、地面に立てられた枯れ枝が倒れるだけのような、無味な相打ちに終わるだなんて。

私は紅茶を一気に飲み干しました。彼らの、あんな死にかたにはなんの価値もありません。でも、彼らだけではなく、世の中のほとんどの人においても、そうなのでしょう。死に価値を見出せず、ただ恐れ、そのあまり、無意味な時間を過ごす。これに関しては、生きるためになにかをしているのだ、と言ってはいけないような気がします。微小な光輝の残照を見続けるだけの単なる不毛な時間稼ぎに、崇高な理由など見つかるはずもないのですから。

死の価値とはなんでしょうか。誰かを守って代わりに死ぬのは、語られる期間、心への影響力を考えると、ほんの少しくらいは価値のあることかもしれません。でも、こんな安っぽいヒロイズムは映画だけで十分です。あまりにも安すぎて、涙のお釣りも出てきません。この映画では、死んだ二人には価値ある観念も与えられず、まさに無駄死にでした。話の都合上、葬り去られたのでしょうか。その都合の意味の大きさがどれほどのものなのか、現時点ではわかりま

せんが、どうせ取るに足らないものだと思います。金髪の主人公は、テンガロンハットに軽く触れて見せ、なんの含みも感じさせない微笑を浮かべて、画面の中でまだ生きているのですから。

死の価値を、「価値のある死」におきかえると、なんとなく、さらに理解を深められそうな気がしました。でも、私にはまだ早いのです。死に価値を見出すのは、もう少し、新しい人生を歩いてからでなくてはいいけません。歩きもせずに、沈思黙考のみで知った気になつてはいけませんのです。

またすぐに喉が乾いて、もう一杯、紅茶をグラスに注ぎました。飲みながら、陽が昇ったら、図書館へ行こう、それから散歩して、ご飯を外で食べて、夜は紗絵ちゃんに会おうと決めました。紗絵ちゃんというのは、中学時代に親しかった友人で、高校は別々になったのですけれど、今でもほんの少しだけつながりがあって、二三个月に一度くらい話をする仲です。そして彼女は、私のことを「つまらない人」と言った最初の人でもあります。私が学校を辞めたと知ったら、どんな顔をするでしょう。あんたはどんどんつまらなさを増している、とでも言うでしょうか。今からもう、楽しみでなりません。

映画のラストシーンは、主人公が盗賊団のアジトに乗り込み、侍を連想させるかのような華麗な銃捌きで、あつという間に下っ端たちをなぎ倒し、最後は親玉に銀色の拳銃を向けました。両の手を胸元で組み、脅えながら更生を誓う親玉を彼は許したのか、無表情のままくると背を向けたときに、彼の背後の赤黒い情動が、ほんの一瞬、危機を私に感じさせましたが、親玉の空起請を理解していたのでしょうか、主人公は振り向き様に一発。男の眉間に命中させたのです。

つまらない映画ではありませんが、私はテンガロンハットに魅せられました。広い底から覗く、影のかかった青い双眸。一部には、影が小さな仮面のように見え、その秘匿性から、正義である主人公

に高貴なものを感じ、同時に私は、帽子がもたらす下部の陰影に、虚無的ななにかを見出したのです。もはや、物語は関係ありませんでした。見たもの、それはおそらく奈落。その果てのない深淵から届く、たゆたう二つの命の明光。そそれを生み出したのは、まぎれもなくあの帽子でした。高貴と幻想の混交する世界に私も触れてみたくなり、キャスケットをかぶって鏡を見たのですけれど、闇を呼び込むことはできませんでした。もし、私の見たものが、映画の演出でしか成せないものであったらば、この想いは、単なる感動として胸にしまっておくべきでしょう。いわば、真似たところで、それはやっぱり陳腐な「ごっこ」にしかないのでしょうか。

外は薄っすらと白んできたようでした。一匹の雀が鳴き始めると、呼応するように声は伝播し、静かだった世界に音のベールが舞い降りました。やがてどこかの家のドアが開く、もうひとつの音。そうしてさまざまな音色があらゆる場所から沸き起こり、一日の始まりを私に感じさせると同時に、やがて目を覚ます父と母になにを言われるか、清新な朝の心地を小言で壊されることを思うと、暗鬱とした気分になり、一刻も早く図書館へ行きたかったのですけれど、当然、まだ開いているはずもなく、それでもとにかく、外へ出る支度をしました。

テレビの天気予報が入梅を告げ、なんとなく、「もう、そんな時期なのか」と小さく思い、雨が続けば、私はずっと、何もせず家にいるのだろつな、と青く灼け始めた空を見、その外の、至福の充実を思わせるようなあまりの輝きに、自身の墮落の予感を、雨のせいにした自分が情けなく感じられ、しばらく、窓の外に広がる天を仰いだのでした。

親がおりてくる前に外出し、コンビニエンスストアで何気に手に取った本を買い、それからハンバーガーショップで朝食をとりながら読書をして、その本が意外と面白かったこともあり、二時間、読了までその場に居続けました。

買った一冊を、一気に読んでしまったせいか、図書館へ行く気はもう消えていて、だから、目的もなく散歩を始めました。人気のない方へない方へ、ごんまりとした木造の無人駅を過ぎ、踏切を渡り、ときおり自動車のタイヤが地面をこすりつける音を聴きながら、気づけばいつの間にか通学路を歩いていて、すぐ近くに、いつもと変わらない淡い緑色の校舎が見えました。私は突如、えも言われぬ寂しさを覚え、母校ではなくなったそれを視界に留めることなくすぐに引き返そうとしたのですけれど、もしかすると、あの教室の窓からTさんがこちらを見ていて、私に気づいたのではないかしら、という気がして振りかえりたくなり、でも、その先にあるだろう恥と哀れみと冷笑を考えると、とても振りかえることはできませんでした。自分自身の未来のためにも、それでよかったのでしょうか。私はもう二度と、この道を通りません。

偽者の母校によって生み出された、絶縁の意を含んだ無情の錘は、私の心の中に深く沈みはじめ、誰が手を差しのべようと、永遠に浮かび上がることもないでしょう。校舎から遠ざかるう遠ざかるうとする私の歩に合わせるかのように、その錘は右へ左へと揺れ、私を内から揺さぶるのでした。生きるために、ただ生きるために辞めたのです。そう言える日は、いつ訪れるのでしょうか。

この町にはもともと人はそれほどいないものの、老人や主婦を思わせる女性たちがちらほらと歩いていて、この時間帯は彼らの世界なのだ、と初めて知ることができました。若者は学校、男たちは会社で働いているのだというその当然のことを、ここで歩行者の彼らを見ることによっていまさら理解したことに、私はちょっとした感動と、無知であることに対する恥と、世界の構図とを知った気になったのでした。その知は、やがて私の新生な世界を広げ、しかし私をどこかに適応させるものかもしれません。つまらない人間の適応――。私は、適応できなくて学校を辞めたわけではありませんが、自身のつまらなさというものが、適応をどこかで拒んでいるひとつ

の要因のようにも思えるのです。私は、どこへ向かうのでしょうか。人にはきつと、それぞれふさわしい場所というものがあるのだと思います。恣意的であろうとなかろうと、いずれその人の在るべき場所へ帰着する。そこには、なんとなく運命的なものを感じてしまうような気もしますが、そうではありません。因果。私のつまらなさが、私をつまらない世界へ追い立てる。それは、私がつまらないから――。ただ、そういうことだと思います。でも、私は新たな世界に降り立ち、簡単な構図を知りました。もちろん、世界はもっと複雑で難解でしょう。私のいま居る場所は入り口で、ここから進めば、もっともつと見えてくるかもしれません。そして、私のつまらなさが次第に濃縮、加圧され、周囲との調和を拒絶するのです。ああ、どうやら私は人生の少し先が見えてしまったようです。

私を形容するこの「つまらない」という言葉はもはや呪縛になり、私をおそらくは卑屈にさせているのですが、いったい、このつまらなさとは何なのでしょう。本当は、私自身にもよく分かっていないのです。紗絵ちゃんが「つまらない人」と言ったから、私はそう思い込んでいただけなのかもしれません。生あくび。私に向けられたよく覚えてもないそれに、自身のつまらなさの片鱗を見出した？ 私に対する母の態度から？ もう、わからなくなつて来ました。早く紗絵ちゃんに会いたい。新しい世界を前にしたのだから、ちゃんと話をしてもつと理解を深めたい。高校生だった私と今の私とはもう、違うのです。これから、自分で道を見つけるのです。私にとつて、どうやら学校というものは、機械音の反響する騒々しい工場だったのかもしれません。そして、私はレーンから退くことによつて、生産を免れたのです。これは一種の廃棄。ささくれ立っていたびつな鉄屑だらけの奈落への降下。でも私は、私のために生きるのです。型に入られなかった私は、最下層への適応しかないのであるかもしれません。結果、どれほど惨めな人生が待っているとも、価値を見つけます。それが、私にしか理解できないものだとしても、私は満足です。

思索に耽って歩いていると、時間はあっという間に過ぎてくれたようで、太陽が地に、疲れたかのように落ちていました。紗絵ちゃんはおそらく帰宅しているだろうと思っただけで足を運ぶと、ドアを開けて迎えてくれたのですけれど、無表情でどこか事務的で、いつもとほんの少しだけ様子が違って見えたのですけれど、それは彼女の長かった黒い髪が、今はボーイッシュという言葉がぴったり当てはまるほどに短くカットされていて、そこに、ひとつの印象として男性の不器用さでも見た、ということだったのかもしれない。

部屋に上がってまず、「髪、切ったんだね」と他愛のない言葉を投げました。紗絵ちゃんは、うん、とだけ言って階段を下りてゆき、わざわざティーポットと色とりどりの花の描かれたカップをトレイでこの部屋まで運んできて、楚々とした仕草で小さなテーブルにカップを並べ、「心機一転したかったのよ」と注がれる紅い糸を眺めながら言いました。

「ところであなたさあ、あたしんちに來た理由ってもしかして、学校辞めたから？」

ティーカップの受け皿に砂糖を二つ添えて差し出しながら、私に訊きました。

「ありがとう。辞めたこと、もう知ってるんだね。なんか、びつくり」

「あなたと違ってあたしは友達多いんだから、そういった他人の不幸の情報はすぐに入ってくるのよ。あ、でも、あたしはあなたを不幸だなんて思っていないわよ。むしろ、賞賛するわ」

「え？　なんか意外。てつきり、つまらない人間らしいつまらない人生、とかそんなこと言われるとばかり思ってたのに」

「あなたがつまらないのは確かだけれど、あなたの人生はまた別よ。たぶん、激動って感じになるんじゃないかしら」

相変わらず彼女の口は悪いままで、でも、好意的に換言すれば素直でもあるということなのだから、私は少し、羨ましさもあって彼女に惹かれているのかもしれない。

「今までなんとなく……。うん、ちつともかな、私がなぜつまらないのかちゃんと考えなかった。会話が続かないからつまらないんだと思い込んでただけけど、辞めたのを切っ掛けに色々と考えられるようになったの。私はたぶんこれからどんどん成長する。だから教えてほしい。紗絵ちゃんの言う、私のつまらなさってなに？」

「考えられるようになったのなら、自分で考えてみればいいじゃない。そのつまらなさは、一方では素敵なことでもあるんだから」

「含みを持たせないでよ」

「じゃあ、つまらないというのは、いろんなものを楽しめないということでもある、とだけ言うておくわ。それ以上はもう言う必要ないし、自分で意味を見つけなければいいのよ。いままであんた、間違った意味づけをしてたんじゃないかなあ。もっとね、ポジティブにいかなくや」

無責任。私がどれだけ「つまらない」という言葉に翻弄されたか言い聞かせたくなったのですけれど、心中では、つまらなさを納得していたのでしょうから、やっぱりわざわざ言う必要はないのかもしれません。そうやって柔和に構えられるのは、これから先、廃棄品なりにも確実にあるだろう自身の成長を期待しているからのような気がしました。

砂糖を二つとも入れ、ティースプーンでかき混ぜると、紗絵ちゃんも同じように紅い液をもてあそびました。

「このつまらなさは、私にとって課題になるのかな」

「それはあんた自身が決めればいいのよ。別に取るに足らないと思えるなら、気にする必要もないんじゃないかしら。あたしが『つまらない』と言いだしておきながらアレだけどね」

「うん……。気長に考えることにする。それで、さっきの賞賛って、なんで賞賛するの？」

カップを口につけると、濃厚な香りが鼻腔を突き、次いで、ほどよい甘さが口腔内に広がりました。なんとなく、この紅茶がかなり高い物のように思えたのですけれど、それがこのカップの文様から

来ているのか、それとも紗絵ちゃんの、一切気を緩めない優雅な所作から来ているのか、その所作を醸成させているかのような、飾り気のない、無機質でやや無理のある、典雅なこの白い空間の、どれから来ているのかはわかりませんでした。紗絵ちゃんは、別段お嬢様というわけでもなく、中流家庭より少しだけ、位が上に位置する家庭の娘といったところでしょいか。私がそれをわかつているからこそ、いま、なんでもないだろう紅茶を高価に思わせたそのことが、彼女を私の中に哀れに映したのです。

紗絵ちゃんは一度も口にしていませんが、おそらく、お嬢様というものに憧れがあるのでしょう。口の悪さは元々でしょうけれど、わがままに育ったお嬢様らしくもあると思えば、どこかわいらしい女の子を見るような可笑しさもこみ上げます。でも、ただ楽を求める人々のようにには下卑ていないので、その点では高貴と言えるかもしれません。

紅茶を二口三口飲んでから、紗絵ちゃんは私を上目遣いで一瞥し、言いました。

「だって、自分の人生を考えたら、そう簡単に辞められないじゃないの。あんたはたぶん、なにも考えずに辞めたんだろうけど、そういうね、奔放さというか自由というかバカっぽさというか、簡単にできるけれどほとんどの人はやらない、ってことをしたから賞賛したのよ」

そのやや棘のある言葉に、私はつい、「生きるために辞めたのよ」と言いたくなつたのですけれど、まだその観念も胸を張れるほど確立されておらず、それに、なにも考えずに辞めたんだろうという紗絵ちゃんの推測が的中していることもあって、私は頷くことしかできませんでした。何年後かに言えるかもしれない「生きるために辞めたのです」という言葉。私はいつ言えるのでしょうか。このままずっと言えないのでしょうか。母親を泣かせてしまったひとつの事件である高校中退を、取るに足らないものだと思って生きるのは、もともとつと墮落すれば簡単なのでしょうけれど、既に私の胸には紗

絵ちゃんの言葉がかすかに響き、そして、簡単な都合のいい理由をつけた言葉で誤魔化すのではなく、これに関してだけは本当に「生きるために辞めたのです」と言いたくなつたのでした。もちろん、怠惰に生きるために辞めた、なんていうふうに思われるような生き方はしませんし、かと言って熱っぽくなるのも望むことはありません。

「今度さ、友達紹介するわ。あんたと同じように学校辞めた、まったく高校生らしさのなかった子。まあ悪い子じゃないから、気が合うんじゃないかしら」

唐突に、けれど、とても喜々とした表情で言つたその言葉は私を意識下で戸惑わせましたが、それが表出する前に、なんとか平然と反応することができました。その戸惑いは本能的な直感から来たもので、おそらく、彼女がなにか企んでいるのだらうと思つたのです。「別に、友達を増やしたいなんて思わないけど」

「あんたこれからどうするのよ。同じような境遇の友達がいれば心強いでしょ？」

「それ、優しさだけじゃないよね」と少し勘ぐつてみると、「どうだろ。あたしは見てみたいだけかな。高校を辞めた二人の人生を」などと返してきたのでした。その無遠慮な返答が私を少し苛立たせ、彼女の瞳をきつく睨ませましたのです。

「見せ物じゃないわ」

紗絵ちゃんは特に臆する様子も見せず「でも、価値があるのよ。

あんたの人生には」と言いました。

「なにそれ。珍しく変なこと言うのね。つまらないって言うておきながら」

「だからそれは別よ」

「世間一般ではきつと価値なんかないわ。勝手にあると思つてるのは紗絵ちゃんだけよ。私の人生を観察するなんて下品なことやめてよね」

「下品？ それも違うわ。あたしはね、鑑賞したいの。映画作品を

観るのと同じようにね」

紗絵ちゃんは少し、ある種の人々の見せるような、自分はもちろん？それ？を知っている、という慢心に近い、高慢な笑みを私に向けました。

「なんの取り柄もないつまらない人間の人生なんて、やつぱりつまらないに決まってる」

「あんたがどう思おうと、判断するのはあたし。見るといっても四六時中見られるわけもないし、それじゃ犯罪的だし。ただ、いまのような感じで時おり話を聞いて、それからその時々姿、表情を見るだけよ。たとえば偉人伝でも、面白い話ばかりでほとんどが纏められているわけだしね。それ以外の人生のすべてを知るのは逆に興ざめだわ」

「なんにしても悪趣味よ」

「あら。じゃあ偉人伝を耽読したいと思っても？」

「それは本でしょ」

「魅力があるってことよ。まあいいわ、あんたがどう思おうと、あたしは勝手に見る。別に、いままでどおりの関係でいいのよ。それで十分あたしにはわかるから。これだったら嫌がる理由もないでしょ？今日はちよつとこれから用事があるから、これでおしまい。

またね。そうそう、お金稼げるようになったら、携帯くらい持ちなさいよ。それと、紅茶は残さないでね。じゃ、あたし行くから」

紗絵ちゃんはいつも、友達が部屋にいようと用事を優先して一人で飛び出してゆきます。普通だったら、部屋を荒らされるとか物を盗られるとか警戒しそうなものですけれど、彼女にはそういった節はまったく見られず、かといって無警戒というわけでもない、と私はみえています。私には、この部屋にある化粧品や香水の瓶、それに白い机の本棚のスペースに一見無造作に置かれてあるオルゴールやビーズでできたアクセサリーといった小物のすべては、角度や距離を緻密に計算して、無音の警報機のもりか人心を試す罠として周到に置かれてあるように思えてしまうのです。そう、彼女は油断な

らない友人なのです。もちろん、計算されていようと本当に無警戒であろうと、私は人の物を漁ったり、くすねたりするような、自身を卑小化させる行為は絶対にしませんが、しかし彼女を見抜くために、あえて行動するのもいいかもしれません。その行為が発覚し、彼女自身を試したのだと知れたなら、私たちの関係はどうなるでしょう。なんだかふと、あの人は喜ぶんじゃないかしら、と思えたのでした。

彼女がいなくなつて部屋を見回し、部屋の隅にある台から、一番残量の少ない、可愛らしいピンク色をした香水の小さな瓶を取り、ジーンズのポケットにしまいました。頻繁に使われているだろう瓶を取ったのは、すぐにでも気づかせるため。この行為に意味があるということまで気づくかどうか、今は、私が彼女を見極める番です。

家に帰ると、食事を終えた直後なのか、テレビのついている明るいリビングに皆がいて、私の顔を見るなりまず父が「おかえり」とゆつくりとやや重たげに、他になにか言いたそうな表情を見せながら母に目配せし、続いて母がバトンを受け取った走者のように表情をこわばらせました。

「辞めてすぐ遊び呆けてるの？　もう九時過ぎよ。女の子なんだから早く帰ってきなさい」

「もう、門限なんて関係ない。しばらくは自由にさせて欲しいの。いろいろ、この先のことも考えたいから」

そう言つて、食事は取らずに自分の部屋のベッドに腰をおろし、冷たい壁にもたれかけながら、香水を取り出して、紗絵ちゃんから早く連絡が来ないかな、と少し不安を感じながらも期待し、部屋に一度だけ、香水の香りをまいたのでした。甘い花のような香りがほのかに届き、そういえば、紗絵ちゃんが一度も私の前でこの香水を使っていないのだと気がついて、彼女のいつもの香りを思い出そうとしたのですけれど、なにひとつとして想起されず、いつ、どんな時に香水を使っているのが少し気になりました。けれど、簡単なことです。大抵は男の気を引く時でしょう。男たちは彼女にはなく、優雅な香りに気が行っているというだけなのに。

長いあいだ起きていたせいか、気をゆるめた瞬間に睡魔に襲われました。それは、守衛が無能を宣告された瞬間に似ているような気がしたのですけれど、だとしたら、私はなにに謝罪すべきでしょう。香水の瓶に？　部屋に浮かぶ小さな香りに？　それとも、私自身に？　私はよほど馬鹿らしくなり、嘆息をひとつ漏らし、寝転がつて天井を見上げ、この部屋に一言、ごめんなさいと謝ったのです。私はなんだか、色々なものに謝りたかったのかもしれませんが。父に、母に、友人に。そして、なにより自分自身の人生に。

これから先、私はどうすればいいのでしょうか。どこかで働いて、なんとかして誰かのお嫁さんになって、小さな安心を得ればいい？ 私はどうやら、そんな人生は望んでいないようです。退屈だったというのも、思えば学校を辞めたひとつの理由としてあるようで、私が求めているものは平穩ではなかったのでしょうか。かと言ってその対照のものを求めているのかと考えてみると、そうではないようです。

私はなにがしたいのか、どう生きたいのか、考えても考えてもなぜかまったくイメージできず、死ぬなら、こういう時が一番いいのだろうな、なんて思いながらも、やっぱり死ぬ気なんてなく、それに、死ぬにしても、何らかの価値は必要です。

人生における価値、人の価値とはなんでしょうか。栄光、偉業、名声、富、知性、権力……。だとすると、人の存在そのものに大した価値はなく、付随的な要素、つまり職業であつたり、肩書き、地位であつたり、社会やなにかに対する貢献の度合いといったもので個々の価値が決定されているように思え、そのスキルのヒエラルキーというものを考えたのですが、「能力」、根幹に位置するこれを含めると、やっぱり付随的なものは付随的でしかないのだ、とも取れ、しかし、時にその付随的なものが能力以上の働きをすることもあるし、それが十分に価値を為すのだから、希少価値のある付随的なものか能力かのどちらかで存在が確立されると、比例した十分な価値が生まれるのかもしれませんが。多くの人は、大小を問わずその付随的なものがないから求め、人生をそれに費やしているのでしょう。でも、一方で安逸を求める、疲弊した、もしくはより動物的な人々がいて、私は彼らを見ると、彼らの人生と価値観を疑問に思うのです。それは、私自身の恐れ、もしくは同属嫌悪に似たものから生じているような気がしているのと、自主退学によってうまれたこの有り余る膨大な時間と、紗絵ちゃんの言葉と、死に価値を見出すという目標のせいでもあります。だから、生きることには価値を見出さずして、価値のある死を迎えられるわけがないと考えた私は、放

逸な彼らの存在に価値を見出すことはできない、といま強く考えるのです。紗絵ちゃんの言った、「でも、価値があるのよ。あんたの人生には」という言葉の真意を、思考の延長で探ろうとしたのですけれど、実際は、栄光、偉業、名声、富、知性、権力、地位といったものには疲弊者と同じように価値を見出せず、もしか、紗絵ちゃん、そんな私を内心で嘲笑したいだけじゃないかしら、と天井の揺れない文様を見ながら猜疑したのでした。

まだ十時前なのに、周りが異様なほど静かだということに気がつきました。まるで、私がたった一人でこの家に住んでいるかのよう
に思え、でも部屋のドアを開ければ、家族の声はいつものように聴こえるのでしようけれど、不意に訪れた侘しさが自身の無価値を強固にしそうで、でもそれを掃う情熱もなく、私はゆっくりと身体を起こし、ただ静かに両の膝を抱え、額を腕の中に預けたのです。

それからすぐ「お風呂に早く入りなさい」と階下の母から声がかかり、瞬間には暗鬱とした心は晴れませんでした。が、素直に階段をおりて、居間には皆がちゃんといえることを確認すると、ほんの少しだけ安堵できたのを実感し、それが嬉しくて「お風呂の前にお茶を飲みたいな」と母に注文したのでした。

母は、もう、なんて言いながらもちゃんと淹れてくれて、私は、そばに誰かがいるということの安心と幸福とに涙が出そうになり、学校を辞めて、私はようやく人生を生きていけるのだというような、そんな気を味わったのです。

煙草を吸い始めた父を見て思い立ったように「私、いまから禁煙することにしたらから」と言うと、訝しげな表情を浮かべ、やがて頬をゆるませて「無理だよ、無理無理」と笑いました。

「私には必要ないものだって気づいたのよ。肉体の健康か、それとも精神の健康か……、煙草を吸ってほっとするような、そんなちよつとした安息なんて必要のない人生を生きるの。見てて、もう二度と吸わないから。これは、この先を生きるための自分なりの決意なの。だから、この程度のことでも成し遂げられないなんていうような

ことは絶対にあつてはいけないのよ」

「なんだ、いきなり変なことを言つて。難しいやつだな。禁煙するならそれに越したことはないよ。禁断症状は本当につらいからな。覚悟しろよ」

「そんなに吸つてないから大丈夫。前に禁煙したときもそうだったし、大したことじゃないわ」

「そうか、わかった。それからまあ、学校を辞めてしまったものは仕方がないし、戻ることも可能だろうけれど、もうなにも言わないから、自分の責任で自分のやりたいようにやればいい。その代わり、困つてもあまり親を頼るんじゃないぞ」

「うん、ありがとう」

「それで、絵はどうするんだ」

「それは、まだ決めてない。ちゃんと決まったら報告するから」

「怠惰にだけは過ごすなよ。いいな」

頷いて、お茶を半分くらいまで飲むと、「前から思っていたが、おまえはやっぱり変人だな。いい意味でも悪い意味でも」と言われたのだけれど、黙ったまま脱衣場へ行き、お風呂の中では顔を何度も撫で、お湯の揺れる音を聞いたり、深く息を吐いたりし、それから本当に落ち着いたのを感じた時に、私は私に対して、小さなお祈りをしたのでした。

その願いが叶わなくても、未来の私は、生きるためにいま此処にいるのです、と言つてしよう。

ところで、父は二つの意味を含めて変人と私に言いました。家族に言われたのは初めてのことです。とくに衝撃もなにもなかったのですけれど、なにに対して言ったのかがわからず、少し考えました。世の中には、人と違うということに価値を求め、あえて大勢の向かう所とは別の場所を目指す人々がいます。少数であるということに、彼らは価値があるのだと思いこんでいるのです。そういった人々は、本来の自分を永遠に見つけられず、「自分は人とは違う、俗ではない」という欺瞞されたくだらな陶酔にいつまでも溺れつつけるの

でしょう。自己の確立のためにマジョリティを軽蔑し、さぶかるちゅあを気取り、あなたは変わっているだとか、人とは違う、という陳腐な、時に悪意ある言葉までも好意的に受け取り、ただ単に少数であることになんでも価値を感じ、自分をそこへ追いやり、そうしてそれ以上を求めず愉悦に浸るのです。私はそうではありません。私はもしかするとどこかにおいては変人なのかもしれませんが、そういうられることを喜びません。個性――、それがなんだというのでしょうか。人と違うということに喜びを感じてにやついていくようでは、それ以上の成長はないように思えるのです。私はテレビをほとんどたまにしか見ませんが、それは、大勢の人々が見るから見ないようにしているのではありません。単に、つまらないからです。そのことに対して、私は俗ではないなどと喜びませんし、正直、どうでもいいことです。似たところはあっても、全てがまったく同じという人間はいないのだから、無情だとか傲慢とか無関心といった側面もあるかもしれないですけど、確立という点で「私は私」、これでいいのではないのでしょうか。だから、仲間内での自分の居場所について、なにも不安を感じる必要はないのです。自分の居場所を探して右往左往するのは、理想を実現すべき時こそであるべきであの人とは違うというそんな醜い優越感、成長を妨げ腐敗を誘う、錆びた足枷でしかないのだから、やっぱり、私は私のまま在ろうと思うのでした。では父は、私のどの部分に対して変人だと言ったのでしょうか。良いと悪いの二つの意味があるらしいのだから、学校を辞めたことに対してだけではないのでしょうか。私を十何年育て、学校を辞めたという一大事を迎えたこと、そのいままでで見た私の全て、生活、それと父が娘をもって歩んだ人生の十数年間の嘆息が私に対する「変人」という言葉で集約されたような気がしたのでした。でもその嘆息は父のもの。父が人生を振りかえっていようと、私には関係のないことです。そしてまた、あの人の吐息が荒れ狂い、嵐になろうとも、私の一切は微動だにしないでしょう。なぜなら、禁煙を含めた種々の決意が、ひとつには父との意識上での訣別を意

味してもいるのですから。

私はお風呂が好きになりました。花を浮かべたり、香りを足したりといったような洒落たことはしませんが、目を閉じて、考え事をして、そうするとすぐ目は覚めるものの容易く眠りに落ちるようで、それがなによりも心地よかったです。ところで、飲酒してお風呂場で溺死する人がたまにいるようですけれど、私にはユーレカ！

と叫ぶかのように真理を見つけて、それから嬉しくて沈んだのではないかしら、と思えるのでした。そう、そうです。もし本当になにかを見つけて満足できたのなら、それが理想そのもので、それこそが本懐だったとしたのなら、その時こそ死に対する価値が生まれるに違いありません。その時こそ、死すべき時なのです。私はなにかを成し遂げましょう。そして、その任を終えた時に、潔くこの世を去りましょう。それこそ生きる意味であり、生きることの価値であり、同時に……。ユーレカ！私の道がいま決まったのです。と言っても、具体的になにをするか、それはぜんぜん決まっていませんし、見つかっていませんし、やりたいこともよくわかっていませんでも落胆することはないのです。まず理想。それがあればあとは其処へ向かえばいいのですから――。

一休宗純の言葉に確かこういうものがありました。

「この道を、行けばどうなるものか。危ぶむなかれ。危ぶめばそこに道はなし。踏み出せばその一歩が道となり、その一足が道となる。迷わず行けよ。行けばわかるさ。一！二！三！陀阿！」

なにか少し違う気がするのですけれど、歴史なんてものはそもそもあやふやなのだから、これはこれでいいのかもしれない。私は私の道を行くのみです。

お風呂からあがって、長湯を寤められて一言あやまり、髪を乾かしながら、背中まであるこの無味な黒髪を、明日はつまり切ってしまおうと決めたのでした。その行為に意味を求めるとすれば、単なる気分転換というだけで十分でしょう。

ベッドに寝転ぶと、とくに物思いに沈むこともなく、夜の有情に

眠ったのでした。

2

ヘアサロンでカタログを見たあと、気に入ったモデルの写真を指差し、「基本はこんな感じで、ヘアピンでぴちつと止められるくらいの長さで横わけのベリーショートにしてください」と告げると、担当の、二十歳くらいの女性スタッフがやや驚いて、「それはもったいないわよ」と諭し気味に話したので、難しいですか？ と返すと「だいじょうぶ」なんてやる気になったものだから、単純だなと内心微笑み、それから学校を辞めたことについての話を長々としたのでした。美容師というのは、話し上手というか聴き上手というか、会話に内容が伴わなくても、お客をほとんど沈黙させませんか、つまらなかったらどう私を相手にしてもそうなのですから、話術にはよほど長けているのでしょう。いつも髪を切ってもらうこの担当には、触れられることで生まれる安心からか、ついつい余計な事まで話してしまい、いつも後悔しています。防御手段としては睡眠があります、目を閉じるたびに「ここはこんな感じでいいかしら？」と私を起こすものだから、ほとんど効果がありません。そのことに關して、別に際立った嫌悪もないので、とりあえずはきちんと返事をして、それからやっぱり、また会話が始まるのでした。

ところで、私は私のつまらなさを克服したような気がしています。それは、理想の片鱗を見たからというのと、紗絵ちゃんの言葉と、禁煙を含めた決意がもたらしたものでしょう。そもそも、私は本当につまらなかったのか、自分でそう思っていただけではないのかしら、という気にもなり、このつまらなさというものが、取るに足らない、本当につまらないものだとも気づいたのでした。

カットが終わって鏡を見ると、そこに映る私が、栄誉でも授かったかのような、眩い自信にあふれているように見えました。おそろくはじつと目を閉じていたから、瞳孔が少し開いたのでしょうか。そ

の瞬間における人々は大抵、魅力的に映るものです。

「お疲れさまでした」

スタッフが気持ちのよい声で言い、私は部屋に戻るとすぐ、切られたばかりの髪をもう一度セットし直し、ヘアピンを挿し、後ろはヘアワックスで軽めにふわふわに、それと紺色のアイシャドーを入れ、あの服が一番似合うんじゃないかしら、とクローゼットを開け放ちました。

アナスイの、薄いブルーを基調とした、でも明るすぎずシルエツトも落ち着いている花柄のワンピースに、半分に切ったロングスカートが無作為に縫いこんで改造した洋服があつたので試着してみると、私はその一度でもう、納得できたのでした。でも、この姿は誰にも見せません。私の中にしまっておくのです。

背伸びしているわけではないのですけれど、五つくらい歳を取って大人びて見える、姿見の中にある私……。ふと、小さな耳が気になり、まじまじと見れば見るほど、耳って変わった形をしているんだな、まるで性器の一部のようだわ、と不思議な気持ちになってきたので、耳たぶを伸ばしてみたり、耳を折って塞いでみたりくたらない遊びをしていると、感じたことのない、やわらかな心地よさにつつまれてゆくのが実感でき、なんだか分からなくなってきた、それを引きずったままベッドに腰をおろし、衝動的に自分の身体を指で少しだけ犯してしまつたのです。

この行為に関して、後悔や罪悪感はありません。それから、これ以外に相手——、つまり男も必要ありません。私は処女ではありませんが、少女の思い出として秘すべき喪失の体験を語るような、濫りがわしい真似はしません。男が必要ないというのは、そこまでの絶頂を求めているという簡単な理由からです。あの、自分が自分でなくなってしまうような快樂、絶頂に、私は恐怖を感じているのです。だから、ちよつとでいい。ほんのちよつとだけ、安心できるような穏やかな波があればそれで十分でしょう？ 「馬鹿な人ほど快樂を求めるのよ」、と紗絵ちゃんも言っていました。私もそうだ

と思います。私は、「これ」に関してだけは、あまり動物的でありたくないと考えているからか、経験も数度ですし、いつものようによくわからない切っ掛けで始まる自慰行為をしたのも、本当に久しぶりのことでした。後悔と罪悪感はありませんが、自嘲だけは忘れません。なぜなら、そうすることによってのみ、私は私を赦せるからです。いまの私を赦せるのは、私だけなのです。

着替えをすまし、お化粧もおとして居間へ行くと、母が短くなつた髪に気づいたらしかつたのですけれど、なにも言わずにテレビの方へ視線を戻しました。

「これから雨が降るそうよ」

私に告げた言葉がそれでした。なんとなくわかります。私のことより、天気の方が気になるのよ、とアピールしているのだということ。別に髪のことをかまって欲しいわけでもありませんが、わざとこういつた行為をする母に嫌気がするのです。もし仮に気づいていないのだとしたら、ああ、それはもしかすると、「人によつては」その方が哀しいことになってしまうのかもしれない。露骨に無視してくれているということは、ある意味では、「私以外の人」にとつて、幸せなことなのでしょう。

私はお腹が空いたから下に来たのですけれど、母にそのことを言い出せず、食事の取りかたを工夫するなんてこともはや考えられなくなりました。母のあの態度に少し、私は遠慮をしてしまったのです。なにか、どんどん距離が離れていくような、いずれこの家族の一員ではなくなってしまうような気がして哀しくて、だから母の横顔を視界に小さく入れながら、黙って同じようにテレビを見るのでした。自分の部屋にテレビがなくてよかったと初めて思い、それからしばらくお互い黙つたまま過ごし、ふと、私は高校を辞めてから、どんどん孤立してゆくのもかもしれないなんて不安を感じ、そつと母へ視線を投げ、一瞥もくれないのだとわかるとゆっくり目を伏せ、いずれ私は自棄になるのだろつな、とそんな気がしたのです。でも、私は自棄になるわけにはいきません。決意が私を押し上げて

くれると信じます。生きるためになにかを為すと決め、それに向けて進む私は、時に、家族すら見捨てなくてはいけない時が来るはずなのです。そのためにも、私はどんな孤独にも耐えねばならないのです。

——紗絵ちゃんに会いたい。私は心の底からそう思いました。紗絵ちゃんの言う、もう一人の中退者にも会いたい。会って、私の道の標を探したい。

その想いは、私を即座に行動させ、昼休みの時間であるだろう紗絵ちゃんの学校まで足を運ばせたのです。私は校内には目立つ私服でしたが、気にせず堂々と校舎へ入りました。髪を切ったばかりの清廉な十六歳である私を、罪を犯す不審者と思っているだろう生徒はどうやらおらず、せいぜい制服でないのをちらちらと見てはなんとなく不思議がつているいくらいで、話題にする様子もなく、そして、教師たちは職員室で昼食をとっているのでしょうか、すれ違わないのは、私の道に四葉のクローバーでも生えてくれたということかもしれません。

紗絵ちゃんのクラスはわからないのですけれど、でも、私はここに来たのです。紗絵ちゃんが人生を見たいと望み、私もいま紗絵ちゃんを望むのだから、きつとすぐに会える。ここでの遭遇というできごとは、二人の運命に織り込まれているに違いないのです。

ほら、あそこに見えました。五人の輪の中でその存在感を際立たせて談笑しています。この出会いが、私たち二人の運命なのです。

紗絵ちゃんがなにげにこちらを見たときに、私はポケットから香水のビンを取り出し、胸元へかかげて見せました。紗絵ちゃんはさして表情を変えることなくこちらへ向かってきます。この香水に関してなにを最初に言うのか、私はとても期待しました。なぜなら、ここでの事柄がすべての幕開けになるはずだからです。

開口まえに彼女はいちど嘆息しましたが、これはもしかすると癖なのかもしれません。

「学校を間違えてるわよ、って言いたいところだけど、もう高校生

じゃないし、私服だし、どうしたの？ それにそれ、あたしの香水よね。さがしたんだけど、あんたが持つてゐることはあんた、成り下がったのかしら。人のものを盗るなんて最低の人種よ。——と言いたいところだけど、親はあたしの部屋に入らないし、いつもあの場所にしか置いてないから、あんただって思ってた——。バレることをわざとやるってことは、単なる馬鹿かそれとも訳ありかのどちらかに違いなくて、あんたの場合、盗ったことでもかまうて欲しかったってことかしらね」

「そんな小さなことじゃない。ここに來たから言うわ。私は紗絵ちゃんを試したかったの」

「……ふうん、面白いことするのね」

紗絵ちゃんは、思ったとおり少し嬉しそうにこちらを見ました。そうして私の手からビンを取り、それを眺めながら「香水はなんのためにつけるかわかる？」と訊いたのです。

世の中に数多く売られている香水、その香りはいったいなんのためにあるのでしょうか。いくら考えても、人の気を引くことくらいしか思いつきません。だからそのままを答えると、不思議に彼女は小さく笑いました。

「大抵はそう。男の気を引いてモテたいとかね。だから間違いじゃないし、それで十分なの。でもあたしはちよつと違う。あたしにとつて、香水はね、記憶させるためにあるのよ。誰かがあたしの香りをしていれば、それをその人がどこかでかいだ時に、あたしのいた記憶が呼び覚まされることがあるし、たとえすれ違っただけでもあたしは香りと共に人々に記憶される。いい？ あんたにだけ言うわ。あたしは世の中に知られないような寂しい存在でありたくない自己顯示っていうのかな。でもね、香水つけるのが精一杯のところだつてことを知っているの。あたしは何にもなれない——。女子高生らしくない、落ち着いてる、大人っぽいなんてことをよく言われるけれど、ただ、それだけなのよね。だから、だからあんたなのよ。あんたの人生が見たいのよ。あんたはなにかしてくれそうなの、そん

な気がしてならないの。友達を紹介するって言ったけど、あの子は一度もここへは来なかった。やっぱり、あんただけなのよ、あんたをあたしの誇りにしたいの」

「……ここに来たのは、間違いじゃなかった。私は紗絵ちゃんにあえてよかった。ちよつと前にね、私は、なにかを為した時にこそ死の価値が生まれる、その時が死ぬ時なんだ、って思ったの。いえ、気づいたの。ねえ紗絵ちゃん、私には何ができる？ 望むのなら、あなたの代わりに私が名前を残してあげる。ここへ来て紗絵ちゃんに会って、私たちは繋がっているんだって気がした。私はもう高校を辞めて廃棄されたような存在だけれど、なんだってやるわ。これからはもう、香水なんて必要ない。それを貸して」

私は紗絵ちゃんの手からビンを受け取り、それを三階の窓からアスファルトの地面へ落としました。

短い破裂音がして、ビンのかけらとピンク色の水が飛散し、小さな花のような世界を創ると、紗絵ちゃんは微笑し「素敵」と零したのに私も頷き、私たちはそのまま学校を後にしたのでした。

なんだってやるというのは、犯罪でもかまわないということです。それは、もちろん覚悟があつてのことと、いまこの時を大切にし、保証のない、いい加減な、いつ叶うかもわからない夢なんかに頼るのではなく、目的を達成するには犯罪がもっとも確実な方法だから――。私は、何かを為すのです。そして、割れたビンを見て放たれた紗絵ちゃんの言葉から、彼女も破壊に心惹かれるのだと気づいたのでした。

犯罪は悪ではありません。いえ、もっと正確に言いましょう。万引きや悪戯といった下卑た小者の犯罪はもちろん論外です。私の言いたいのは、社会を震撼させる犯罪は悪ではなく、人々の生活に刺激を与える偉大なるエンターテイメントだということ。なぜなら、人々はそのことについて、他人顔で大いに語ることができるのですから。行われたエンターテイメントのその犠牲者は、その数は、エ

ンターテイメント性をより深めるための数値に過ぎないのだと思います。私は！ いまこそエンターテイナーになるのです。犠牲者には、私があのでありがとうと謝辞を述べるでしょう。

私たちは時間を見つけ、何度もあい、計画をいくつも綿密に練りました。紗絵ちゃんには私ほどの覚悟はありません。しかし、何者にもなれないという絶望があります。だから、彼女は名を残せはしないでしょうけれど、いつまでも私と共にあるのです。

計画を練るだけで一週間以上かかっています。何が最も話題性と残虐性、そして美的であるか。美意識は必要です。美は全てを超越するからです。私のプロローグにふさわしい美――。破壊がもつともそれらしくはありますが、例えば爆弾を使用したとしても、爆発、破壊の瞬間には美があるでしょうけれど、残ったものは単なる瓦礫で、これが廃墟ならまだわかる気もしますが、私のような無知が行った場合は、ひとつの違和を生じさせるに終わるでしょう。

練れば練るほど、私たちにはとうてい、テロのような大規模なものを起こすことは不可能だと至り、少し時間をおくことになりました。

人々を退屈から少しのあいだ解放するエンターテイメント、後世まで名を残す偉大なる芸術。私には、いわゆる犯罪すらもできないのでしょうか。

帰宅して静かな夜、布団にくるまってもなかなか寝つけず、私は考えました。この人生は、向かうべきところへ向かっていたのだ、最初からこのエンターテイメントのための人生だったのだ、学校を辞めたことや、自身のつまらなさ、紗絵ちゃんとの関係、母の無関心といった要素のすべてが、私をそこへ向かわせている、という気がし、それを確信するためにベッドから飛び起き、どこかマンションの屋上といった高い所から飛び降りることで、私はきつとそれで

も無事である、という運命を試したくなつたのですけれど、ふと、男の人の、あのゴムのような胸が恋しくなつて、誰かからの抱擁を望んだのでした。

私たちはまず、世間の反応を知るために犯行予告状をパソコンで作成して、マスコミや遠くの警察署に計五通、送付し、自身の情報に注意を払い、ネットカフェからネットの掲示板にもいくつか投稿しました。内容は稚拙ですが、こういった具合です。

犯行予告

六月二十日より一週間の期限を設け、第一段階として、H県で私たちは無差別に数名を殺害します。この殺人劇はエンターテイメントです。

これに同調する者は、私たちの犯行が報道されたのちに、一斉に模倣、蜂起してください。

国民数万人、数十万人が一斉に殺人事件を起こせば、警察はもはや機能しなくなるでしょう。

隣の人が人を殺しましたよ。さあ、次はあなたが憎む人を殺す番です。私たちは、皆がそう言つてこの現象が伝播すると確信しています。私たちは、皆がそう言つてこの現象が伝播すると確信しています。

時が経ち、落ち着くかこの娯楽が絶頂を向かえた時、私は名乗り出ましょう。そして私は人々の静かな声で迎えられますのです。

ああそれと、警察諸君には勇躍をほのかに期待します。

このようなものでしたが、人々が殺人劇を模倣したり、人々に伝播したりするなどは毛頭思つていませんし、警察の捜査力を侮つてもいません。私は逃げる事が目的ではないのです。できる限り

の演出で人々を盛り上げる。それだけです。

紗絵ちゃんは、私たちのパフォーマンスを確実に行うために、抵抗のない子供をまずは殺そうと提案しました。そう言った彼女の表情は狂気を感じさせるものではなくあっさりとしていて、この提案はまるで、お腹が空いて早くご飯が食べたいからお客の少ない店を選んだ、というようにすら思えたのです。でもそれは理になっ
ているし、しかも残虐性があることで世を震撼させるには十分でしょう。

「あなたがやるのよ」

私は、もちろん人を殺したことはありません。猫や鶏といった小動物さえ殺したことはないのです。私は本当に人を殺せるのでしょうか。

昔、猫を高いマンションから放り投げて殺したということを喜々として語っていた男子のクラスメイトがいました。彼はその行為を、まるで自分が英雄にでもなったかのように高言していました。私は彼のような吐き気のする陰険を秘めた属性の人間ではありません。私は違うのです。私は……、私は……、そう……、私は紗絵ちゃんのために、そしてなにかを為す、という人生における唯一の目的を達成するために、私だけの暁を見るのです。

これは、殺害するというのは、遊びでも性癖でもありません。私のようなつまらない者が、唯一取れる手法。終わったあとの到達点は、犯罪者であろうと、偉業を為したものであろうと同じに違いなのです。称賛か罵声かは関係ありません。私は深く覚悟を決めて、この世に名を残しましょう。願わくば、私と同等に被害者たちの名も残らんことを。

唐突に降りだした雨が、私を憂鬱にしました。しかし、決行は雨天の時。人通りは少なく、悲鳴も雨滴の気まぐれな音によってかき消される。だから憂鬱になってはいけないのです。

窓を開けて、灰色の住宅街を眺め、どうせいつか人は死ぬ、どうせいつか人は死ぬと自分を勇気付けました。雨はなにも言いはしま

せん。ただ地面に落ちるだけ。その一滴一滴がいたいなんだというでしょう。なにを象徴してくれるというのでしょうか。そんなものに私は思いをめぐらす必要はないのです。

いま路上を園児と母らしき人が通りました。この町を一人で歩く子供はそうそう居ないような気がし、ああ、だったら私に子がいれば、と思ったのですけれど、やっぱりなにもできないでしょう。できるわけがないのです。我が子だけはきつと。

怒りに任せ発作的に人を殺すのではなく、私は冷静なまま人を殺すのだろうということを考えるだけで怖くて怖くて、もしかすると殺害後はもう、自分が自分でなくなるんじゃないかしらとも思え、どうしても紗絵ちゃんに会いたくなつたのでした。あの子はきつと人を導く力があるのでしよう。でも、私は利用されるわけじゃない。私の人生を彼女に見せてあげるだけ。私の人生における理想の方が崇高に違いないのですから。

家に、紗絵ちゃんから電話があつて、犯行予告がネットの一部でちよつと話題になつてしていると教えてくれました。そして、盛り上げるためにちよつとした演出も加えていると。なら、明日やろう。雨が降っているなら、私は明日決行します。紗絵ちゃんにそれを告げると、静かに頷いたようで、「氣をつけてね」と言くれました。

生きるために学校を辞めた。私は、生きるために、そして生きた証を残すために学校を辞めたのでしよう。都合のいい理由。これでよかったのです。あと何十年も生きる必要なんてありません。計画を実行後は、紗絵ちゃんに私の顔と少しの弁舌の映像を撮ってもらつて、それをネットに流します。

やります。やります。いわゆる、世間の人々は私の映像を見て糾弾し、それぞれの義憤に駆られることになるでしょう。なかには同調する者もいるかもしれませんが。しかし、それがなんだというのです。彼らはいつも、座布団の上でお茶を飲みながらものを言うだけではありませんか。非難の石を投げようとも近づかず、自由な大罪人を目の当たりにすれば冷えた洞穴のように沈黙し、執行人にもな

れない。彼らは湿った陰を好むのです。私はそれを与え、そして、私は間違いなく暁を見るでしょう。

雨が、宙の傷跡のようにだんだん細くなって、やがてなくなりました。でも、明日はきつとまた雨が降る。大地は私のような者にこそ応えてくれると信じます。そうでなければ、私の人生は一体なんなのでしょう。大地はきつと、世間の人々に倦んでいるに違いなのです。だから、私の行為を見たいに違いなのです。紗絵ちゃん。私は間違っていないよね。私のようなつまらない人間にできる唯一の証明だよね。誰か。お願いします。私を抱きしめてください――。

私はしばらく静かに涙を流し、そうしてずっと眠れないまま、慈雨の朝を迎えたのでした。母と弟の澁刺なおはようの声が聞こえ、二人にも一日が始まりました。私はもう、挨拶はしません。数日もすれば、代わりに母の罵声と嗚咽を聞くでしょう。誰よりも心のこもっているだろうその声を。

>了<

4（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7266r/>

凶

2011年11月4日03時15分発行